

校門からまちなかへ

雨でも風でも、あいさつ運動



平成24年度から取り組みが始まったコミュニティ・スクール(CS)。3年間を一区切りとして、現在はさらに延長の認定を受けて2期目に入りました。地域や保護者が学校運営に携わり、地域が一体となってより良い教育と学校の活性化を目的として行われている事業の中で、今月号ではCSの原点ともいえる「あいさつ運動」にスポットをあてて、この運動の中心的存在である小川さんと、3月5日の卒業式で高校生活を終えた卒業生を代表して、鈴木さんと熊谷さんの2人にあいさつ運動について話をうかがいました。

広がるコミュニケーション

多古高校学校運営協議会 生徒指導班

小川 成義さん(鈴木)

多古高校に千葉県教育委員会が指定する学校運営協議会という組織が設けられ、1回目の会議で、何が今の多古高校生に求められているのか?について話し合われました。その際に、「学力はもちろんだが、一番重要なのは自分の思いを相手に伝えるためのコミュニケーション能力で、それが今の子どもたちは非常に低く、多古高校生についても例外ではない」という話が出ました。

私が属している生徒指導班では、多古高校を魅力のある学校にしていきたい。コミュニケーション能力を身に付けていくひとつのきっかけになることを期待して、校門でのあいさつ運動を毎日行うことにしたんです。

最初、生徒たちは校門に立っている私たちを「あの人たちは何だろう?」とい



笑顔で毎日あいさつを交わす小川さん

う不審な目で見ていたような感じがありました。しかし、毎日続けていると、私たちがただ単に「おはようございます」だけではなく「今朝は寒かったですよ」とか「今朝は自転車が進まないほど風が強く大変だったなあ」といった短い会話が自然と出てくるようになったし、生徒たちからも、少なくとも私たちは敵ではなく自分たちを応援してくれている存在だと認識していることが伝わってくるようになりました。

をかける非常に素直でいい生徒たちが通っている学校だということを感じられるようになってきました。また、いろいろな人がいろいろな情報を教えてくれるようになりました。「通勤の際に、バスに乗ったら多古高校の女子生徒が乗っていて、降りる時に「ありがとうご

ざいました」と言ってバスを降りていったのを見て、高校生ってこんなに礼儀正しいものか?って驚きましたよ」という話があったんです。まちなかで高校生がよくあいさつをしてくれるという声も聞こえてきます。

今、この運動の趣旨に賛同してくれて、一緒に校門に立ってあいさつをしてくれる運営協議会の委員以外の方が数名いらっしゃいますが、この先は、このような仲間がさらに増え、あいさつ運動の輪が町じゅうに広がるといいなと思っています。

気付いた、あいさつの大切さ

元野球部キャプテン

鈴木 匠さん

登校する時は、眠かったり機嫌が良くない日があったりもする中で、1年生の

時から皆さんが毎朝元気よくあいさつをしてくれたことは、どんな気分の時であつても嬉しかったです。多古高校ってまぢぐるみでよくしてくれるので、第一印象的にこの学校はいい学校だなんて思いました。

自分は野球部だったので、例えば練習試合の時などは、グラウンドの使い方や荷物の置き場所などを説明しなければならぬんですけど、初対面の相手だと、あいさつすることが会話のきっかけになります。また、あいさつをしてもらうと、悪い気分には絶対ならないですし、気分が晴れるというか、明るい気持ちになれるので、あいさつは大切だと思います。自分自身においても、以前と比べると知らない人に対してあいさつをするようになったと思います。

生徒の中には、毎朝あいさつをしてくれる小川さんたちにあいさつを返さない生徒もいます。在校生や新入生にはきちんと元気にあいさつを返して欲しいし、自分からするようになって欲しいですね。

元生徒会長

熊谷 朱里さん

最初は、一週間ぐらいのあいさつ運動なのかな?って思っていました。でも毎日のように、天気が悪い日でも傘を差してあいさつをしてくださるし、それだけではなく「テスト頑張つて」とか日常の話もしてくださるので、「今日も頑張ろうかな」という気持ちになりました。

中学校の頃は先輩や同級生に対してはよくあいさつをしていましたが、高校になって同じ部活の先輩や同じクラスの生徒に話しかけないことにびっくりしました。もつと学校全体であいさつをするようになる、さらに良い学校になるんじゃないかと思っています。

この運動を通じて、私自身の中で、「自分もあいさつをしよう」と思うようになりました。知らない人に対して、優しく話しかけてくれる小川さんたちのよ

まぢぐるみの一端として

うに、たとえ自分が知らない人でも声をかけてみようかなって思います。

「声かけ」という一方通行から始まったこの運動は、毎日繰り返されることで、徐々に双方の「コミュニケーション」へと変わり、さらには町中にもその波が広がっています。小中学校と比べて地域との関わりが難しいとされる高等学校でのCSですが、多古高校での取り組みは、その流れはゆっくりかもしれませんが、確実に前へ進んでいます。そして、学校発進のCSだけにとどまらず、「まぢぐるみ」の中のCSという位置づけで、地域がより深く関わり、地域と共にある学校という大河へと成長することが期待されています。

—平成27年度振興事業—

地域とともに学校の活性化を目指す多古高校後援会では、町から助成を受けて次の事業を行いました。

- ①部活動の大会へ生徒等を応援派遣
- ②授業力を向上するための職員研修
- ③近隣中学校へのPR
- ④コミュニティ・スクール情報誌の発行
- ⑤講演会の開催

